

## P2-29-4 当院でのペッサリー自己着脱の現状について

梅田ガーデンシティ女性クリニック<sup>1</sup>, 泉北藤井病院泌尿器科<sup>2</sup>  
加藤稚佳子<sup>1</sup>, 成本一隆<sup>2</sup>

【目的】骨盤臓器脱の保存的治療にペッサリー挿入がある。長期使用に際し腔壁のびらんや炎症などの合併症が問題になるので、当院では主に自己着脱の指導をしている。今回我々は自己着脱ペッサリー使用の持続性、自己着脱の利点、問題点などの検討を行った。【方法】2009年10月から2012年9月までに、ペッサリーを使用し自己着脱を指導した96例を対象とし、後方視的に検討した。また1年以上継続している症例に対してはアンケートを行い満足度や問題点について検討した。【成績】当院でのペッサリーの自己着脱を指導したのは使用全体の84.2% (96例/114例)であった。平均年齢は63歳 (最低33歳, 最高85歳)であった。他院にてペッサリー使用しており当院にて自己着脱の指導を行ったのが23例あった。継続状況では現在使用中が33例 (34.4%), 手術に変更25例 (26.0%), 来院なし23例 (24.0%), フェミクッションに変更6例 (6.2%), その他9例 (9.4%)であった。ペッサリーの平均使用期間は13.4か月であり、最長使用期間は5年であった。現在使用中の13例へのアンケートでは大変満足が3例, 満足が10例であり現在の使用に問題はないが、今後については手術を含め考えているとの回答が6例 (46.1%)であった。【結論】ペッサリーの自己着脱は合併症も少なく長期使用が可能であった。しかし手術への変更やアンケートの結果よりペッサリーのみで長期の治療を希望している患者が少ないことも示唆された。また途中で来院しなくなる症例も24%見られペッサリーが適正に使用されているか判断できないためいかに継続して来院してもらうかを考慮する必要があると思われる。

## P2-29-5 慢性外陰痛 (Vulvodynia) 25例の治療とその効果

香川県立保健医療大看護学科<sup>1</sup>, 香川大<sup>2</sup>  
塩田敦子<sup>1</sup>, 秦利之<sup>2</sup>

【目的】原因不明の慢性外陰痛をVulvodyniaとよび、婦人科外来で思いのほかよく遭遇する疾患である。しかしその治療法は確立しておらず難渋することが多い。当科で経験した25例のVulvodyniaについて、その背景、治療法、効果を検討する。【方法】対象は2006年4月から2013年3月までに外陰部痛を主訴に当科を受診した患者において、婦人科的診察で器質的異常のない25名である。治療はホルモン補充療法 (HRT)、漢方薬、対症療法、向精神薬等を適宜行った。疼痛についてはNRS (Numeric Rating Score) で治療前を10として10段階で評価した。【成績】25名の平均年齢は57.3歳、当科初診までの平均罹病期間は8.5か月であった。ISSVDの分類による診断はGeneralized vulvodynia21例, Localized vulvodynia4例であった。既往に手術歴を持つものが13例 (52%)あり、膀胱炎等炎症後の発症は7例 (28%)であった。当科で行った治療は漢方薬24例, HRT9例, プレガバリン9例, 向精神薬7例であった。治療の効果は2-4週間で評価し、効果がなければ薬剤を変更あるいは追加した。漢方薬のみで効果のあったものは24例中11例, HRTのみでは9例中3例であった。プレガバリンは9例中5例で効果が認められ、SNRIの著効例が1例あり、SSRIは2例で効果的であった。3例ではどの薬剤も無効であった。Localized vulvodyniaでHRTが効果的なことが多く、炎症後発症例でプレガバリンの効果がみられた。罹病期間の長いもの、心理的背景の複雑なものは治療が困難であった。【結論】治療法の確立していないVulvodyniaにおいて、25例の治療歴を示した。症例の背景や疼痛の状況等によって治療の選択ができるアルゴリズムの構築が望まれる。

## P2-29-6 月経困難症に対する漢方薬の効果の検討—芍薬甘草湯と当帰建中湯の屯用服用にて—

北里大東洋医学総合研究所漢方診療部  
森裕紀子

【目的】月経痛に対して多くの女性は漢方薬より消炎解熱鎮痛剤 (以下鎮痛剤) を使用し、時に鎮痛剤の多用が問題となる。患者が漢方薬より鎮痛剤を選択する主な理由は、1) 鎮痛剤は種類が少ない、2) 月経痛の症状がある時のみの短期間の服用でよい、の2点と思われる。そこで、漢方薬単剤を月経時の腹部症状がある期間に服用するという簡易な服用方法によって、月経痛に対する鎮痛効果の有無の検討を目的とする。当研究は当院研究倫理委員会の承認を得ている。【方法】対象は、4週以内に漢方薬を常用してない月経痛のある女性とする (n=7, 平均年齢35.9歳)。ツムラ芍薬甘草湯エキス2.5gとツムラ当帰建中湯エキス2.5gを用い、最大量は24時間7.5gまでとする。漢方薬は疼痛時のみの服用で、鎮痛効果が不十分の場合は鎮痛剤を併用する。月経痛をベインスケールで評価し、漢方薬、鎮痛剤の服用時間と痛みの変化を記録する。研究終了後に副作用の有無などをアンケート調査した。漢方薬の効果は、鎮痛剤の使用回数と、ベインスケールの変化を漢方服用前と比較検討した。【成績】1) 全例で鎮痛剤の使用回数の減少と漢方薬の鎮痛効果を認めた。アンケートでは、1例は鎮痛効果不十分のため今後も月経時は鎮痛剤を使用する、2例は痛みの軽いときのみ漢方薬を使う、4例は漢方薬にする、という回答だった。2) 芍薬甘草湯は3例にむくみの自覚があった。【結論】漢方薬屯用の鎮痛効果は鎮痛剤より弱い、患者の満足度は高かった。副作用の点で、芍薬甘草湯エキスは屯用使用でも副作用の注意が必要であった。半数の症例は月経時の疼痛管理を鎮痛剤から漢方薬に変更可能だった。